

## 『後拾遺集』卷六「冬」評釈 (二)

安田純生

宇治にまかりて網代のこぼれたるを見てよめる

中宮内侍

宇治川の早く網代はなかりけり何によりてかひをばくらさむ

〔大意〕 宇治川の網代はすでになかったことだ。この宇治で何に心を寄せて日をくらそうか。

〔鑑賞〕 前歌と同じく網代を主題とする作品であるが、網代漁の時期が過ぎて、すでに網代の施設が取り払われていた現実を歌っている。

網代漁は、秋の終りから冬にかけておこなわれた模様である。

『延喜式』の規定によれば、九月から十二月まで、網代で捕えられた水魚が宮中に貢献される決りとなっていた。また、屏風絵の月次絵では、おおよそ十月の画題となっている。<sup>(1)</sup> その最盛期は、『源氏物語』の「橋姫」の中で、「十月になりて五六日のほどに」宇治を訪れた薫が、人々に「網代をこそ、このごろは御覧せめ」と勧められている点などから推して、ほぼ十月の初旬であつたらしい。中宮

内侍が何月に宇治へ出かけたかは明らかではない。が、冬の終りであったことは確かであろう。まだ季節は冬でもあるし、宇治川は網代の名所でもあったので、網代見物を期待していたわけである。

網代は、水魚が寄るものである。したがって、「何によりてか」の「より」と「ひをばくらさむ」の「ひを」は、網代の縁語となる。ほぼ同様の技巧を用いた先行作には、

すぐしくるひを数ふとも宇治川の網代ならねばよらじとぞ思ふ

〔古今六帖〕第三 作者未詳

もろともに来れどかひなき網代かなよる白波にひをしへぬれば

〔忠見集〕

わが宿にあるべきものをこの度は網代によりてひをもふるかな

〔元真集〕

などがあり、中宮内侍と同時代の歌人の作にも、

秋はひをかぞへてゆかんよりて見る網代の波は色もかはらず

〔和泉式部集正集〕

網代木によるとは聞きしものなれどひをくらすとは今日こそは  
見れ

〔赤染衛門集〕

網代にてひをのみくらす宇治人は年のよるをぞ歎かざりける

〔長曆二年師房歌合〕 弁乳母

ひをへつつ散るもみち葉もこの里は網代によりて見るぞ嬉しき

〔長曆二年師房歌合〕 作者未詳

などがあつた。その意味では、常套的な技巧による軽い内容の歌といえよう。『拾遺集』巻十七所収の「いかでなほ網代のひをにこととはむ何によりてか我をとほぬと」(修題は、「ひを」が「日を」の意になっていないが、第四句が共通しており、これも中宮内侍の念頭にあつたのではなからうか。

俊綱の朝臣の讃岐にて綾川の千鳥をよみ侍りけるによめる

藤原孝善

霧はれぬ綾の川べに鳴く千鳥こゑにや友のゆくかたを知る

〔大意〕 霧のはれない綾川の川べで鳴く千鳥は、その声によつて友のゆくえを知るのか。

〔鑑賞〕 千鳥を主題とする三首のうちの一首である。三首のうち、初めの二首は川の千鳥を、残りの一首は海の千鳥を歌っている。川の千鳥を歌った作を先に配列したのは、宇治川を詠んだ前歌との連接を密にするためであろう。

周知のごとく、千鳥は必ずしも冬の鳥というわけではない。シロ

チドリやイカルチドリはわが国に一年中いるし、コチドリのように春にわが国に飛来する種類もある。それが冬の景物として意識されたのは、チドリの種類によつては、冬期に大きな群となって生活するものがあり、それが目立つたためという。

さて、橘俊綱が讃岐守であつた期間については、斎藤熙子氏が延久から承保にかけての頃と考証されている。したがつて、孝善の歌も、その頃に詠まれたと考えていいわけである。『千載集』巻十には

俊綱朝臣、讃岐守にまかりけるとき、祝の心をよめる

藤原孝善

君が代にくらべていはば松山の松の葉かずは少なかりけり  
という一首も見え、孝善と俊綱との親しさが想像される。

綾川は讃岐の国府の傍らを流れる川で、これを歌に詠みこんだのは、孝善が最初であつたようである。孝善の歌が『後拾遺集』に入集したことによつて綾川は歌枕になったともいえるのである。同じ機会に詠まれた綾川の歌が、孝善の作以外にも存したはずであるが、残念ながら伝わらない。ただ、綾川を歌枕とした功績は、孝善よりも、歌会を主催した俊綱にあると見るべきであろうか。俊綱は歌枕に対して並々ならぬ関心を寄せていた人であつた。

ともあれ、孝善は、綾川の千鳥を詠むにあつて川霧をとりあわせた。川霧と千鳥の二つ、あるいはそれらに何かを加えて一首を構成した歌は、

千鳥なく佐保の川霧たちぬらし山の木の葉も色まさりゆく

〔古今集〕巻七 壬生忠岑  
夕されば佐保の河原のかは霧に友まどはせる千鳥なくなり

〔拾遺集〕巻四 紀友則

川千鳥すむかはの上の立つ霧のまきれにだにもあひ見てしかな

〔古今六帖〕第六 作者未詳

たなばたは今や別るる天の川かは霧たちて千鳥なくなり

〔貫之集〕

さ夜ふかくたつ川霧もあるものをなくかへる千鳥かなしな

〔清慎公集〕

川霧はかはべをこめてたちにけりいづこなるらん千鳥なくなり

〔長能集〕

などと先例が多い。なかでも友則の作はよく知られていた。孝善は、友則の歌の下二句に拠りつつ、その発想を逆にして「友のゆく方を知る」といい、新味を出そうとしたのであろう。

永承四年内裏の歌合に千鳥をよみ侍りける

堀河右大臣

佐保川の霧のあなたに鳴く千鳥こゑは隔てぬものにぞありける

〔大意〕 佐保川の霧の向う側に鳴く千鳥の声が聞こえる。霧はその声を隔てないものであったよ。

〔鑑賞〕 作者は、藤原頼宗である。永承四年十一月九日に催された

「内裏歌合」の十二番右の歌で、藤原兼房の「夕ぐれは空に千鳥ぞ聞こゆる天の川原に鳴くにやあらむ」とつがえられている。判

者の源師房は、頼宗の作を勝とした。

佐保川は、いわば『万葉集』以来の千鳥の名所である。『八雲御抄』巻五名所部には、「河」の項に「さほ（万）。千鳥。紅葉。霧。忠岑歌。蘭」とあり、「河原」の項にも「さほの（万）。柳。千鳥」とある。『万葉集』に見られる佐保川の千鳥の歌としては、

千鳥なく佐保の河瀬のさざれ波やむ時もなし吾が恋ふらくは

〔巻三 大伴郎女〕

千鳥なく佐保の河門の瀬をひろみ打橋わたすながくと思へば

〔巻三 大伴郎女〕

千鳥なく佐保の河門の清き瀬を馬うちわたしたいつか通はむ

〔巻四 大伴家持〕

（前略）あらかじめ かねて知りせば 千鳥なく その佐保川に（後略）

〔巻六 作者未詳〕

佐保川の清き河原に鳴く千鳥かはづと二つ忘れかねつも

〔巻七 作者未詳〕

など数首があげられよう。

川霧と千鳥の取り合わせがありふれたものであることは前述した。佐保川の霧の中で鳴く千鳥を詠んだ作は、『万葉集』には見当たらないが、王朝の和歌には多く、その一部は前に掲げた。さらになお、

千鳥なく佐保の川霧たちかへりつれなき人を恋ひわたるかな

〔古今六帖〕第一 凡河内躬恒

千鳥なく佐保の川霧さほ山のもみちばかりは立ちなかくしそ

(源順集)

暁のねぎめの千鳥たがためか佐保の川霧たちかへり鳴く

(能宣集)

なども頼宗以前にあり、「千鳥なく佐保の川霧」という句は、慣用句としてあったようである。

頼宗の歌は、題材の面では、何の新しさもないといえる。しかし、霧を、千鳥とその鳴き声を聞く者との中間にある、隔てと解し、「霧のあなたに鳴く千鳥」と表現した点は、当時において新鮮な感じを人々に与えたいらしい。霧の中から鳥の声が聞こえる旨を歌った作に、紀貫之の「秋霧はたちかくせどもとぶ雁のこゑは空にもかくれざりけり」(貫之集)があった。藤原兼輔の「白雲の中にもがひてゆく雁も声はまがはぬものにぞありける」(兼輔集)も、霧を詠んではいないが、貫之の歌に似ている。頼宗は、これら二首、とくに貫之の歌を学んだのであろう。

相模

難波がた朝みつしほにたつ千鳥うらづたひする声ぞきこゆる

(大意) 朝、難波潟に潮が満ちてきたので飛び立つ千鳥、その千鳥が浦をつたってゆく声が聞こえる。

(鑑賞) 前歌と同じく、永承四年の「内裏歌合」のために作られた歌である。ただし、歌合の証本には見えない。歌合の開催以前に出詠歌の選がおこなわれ、それにもれたのであろう。

難波潟は、『万葉集』の歌にも詠まれ、古くから歌枕となっていた地名である。かつては、上町台地の西に広い干潟が存在していたらしい。その干潟に餌をあさる千鳥が、潮が満ちてきたので少しづつ移動してゆく、というのである。山部赤人の「若の浦にしほ満ちくれば潟をなみ葦べをさしてたづ鳴きわたる」(万葉集 巻七)とよく似た情景を歌っている。赤人の一首は、『古今六帖』第六や『赤人集』、さらに公任撰の『金玉集』「深窓秘抄」『前十五番歌合』にも収められており、当然、相模の知識の中にもあったはずである。同様の情景を歌った作には、他にも詠み人しらずの「難波潟しほ満ちくらしあま衣たみの鳥にたづ鳴きわたる」(古今集 巻十七)がある。相模は、直接的には、この『古今集』の歌に拠りつつ、田鶴を千鳥に変えたのであろう。潮が満ちる時間を朝とした点については、『古今六帖』第三所収の「難波潟あさなあさなに満つ潮のみちにこそみてかわく問もなし」を学んだと推測される。

結句の「声ぞきこゆる」は、太山寺本・日野本・神宮文庫本などで「声きこゆなり」となっている。本文としては、「声きこゆなり」が正しいかもしれない。しかしいづれにせよ多くの先例があり、鳥を歌って結句を「声ぞきこゆる」あるいは「声きこゆなり」とするのは、表現類型のひとつとなっていたようである。

もっとも、浦づたいする千鳥の声に着目したのは、相模が初めてであったように思われる。後に、道因は、相模の歌を踏まえて「岩こゆるあら磯波にたつ千鳥ころならずや浦づたふらむ」(千載集 巻七)と詠んでいる。二首を比較すると、明らかに道因の方がすぐ

れている。相模の歌は、表現が全体的に平板で、イメージを喚起する力に乏しい。

題知らず

和泉式部

寂しさに煙をだにもたじとて柴をりくぶる冬の山里

〔大意〕 寂しき故に、せめて煙だけでも絶やすまいとして、柴を折ってくべている、そういう冬の山里であるよ。

〔鑑賞〕 山里の煙を主題とする一首である。海を歌った前歌と対照的であるが、『後拾遺集』の撰者、藤原通俊は、変化のある展開を意図したのであろう。一方、前歌が朝の歌であったのに対し、これは昼の歌である。そして次が夜の歌であることからすれば、朝・昼・夜という連続性をも考慮した配列であるといえる。

この歌は、『和泉式部集正集』には「わびぬれば煙をだにもたじとて柴をりたける冬の山里」の形で採られており、初句と第四句が相違する。和泉式部自身の推敲か、通俊の手による改作か、明らかではない。源宗于の作に「山里は冬ぞ寂しさまさりける人めも草もかれぬと思へば」(古今集 巻六) がある、冬の山里を寂しい場所とするのは、常識的な観念ともなっていた。したがって、初句を「寂しさに」とする方が、理解ししやすい反面、やや型にはまった感のあるのも確かである。

冬の山里にたつ煙といえは、ただちに炭竈の煙が想起される。が、ここは、「柴をりくぶる」とあるから、当然ながら炭竈の煙ではなく、炊事・暖房用の火の煙である。その煙を盛んに立てて、山

里の寂しさをまぎらそうというのである。逆かというと、煙が絶えれば寂しさがいっそう深まるわけであるが、煙の絶えた情景の寂しさを歌った作に、紀貫之の「君まさで煙たえにししほがまのうら寂しくも見えわたるかな」(古今集 巻十七) があった。『好忠集』に「煙たえもの寂しかる庵には人こそ見えね冬は来にけり」も見える。同集にはまた、「柴木たく庵に煙たちみちて絶えずもの思ふ冬の山里」があり、式部は、とくに好忠の二首から大きな影響を受けたようである。

『西行上人談抄』によれば、西行は、式部のこの歌を高く評価していた。久保田淳氏が指摘されたように、西行の「寂しさに耐へたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里」(新古今集 巻六) には、式部の歌が影を落していると見られる。

冬の夜の月をよめる

大式三位

山の端は名のみなりけり見る人の心にぞ入る冬の夜の月

〔大意〕 月が入るといわれる山の端は評判だけであったよ。本当は、見る人の心に入る冬の月であった。

〔鑑賞〕 冬の夜を主題とする二首のうちの一詩である。前歌の結句「冬の山里」を受けて、「山の端は」という初句で始まる。次の歌の初句「冬の夜に」は、この歌の結句「冬の夜の月」を受けているのであろう。つまり、和泉式部・大式三位・増基の三首は、尻取り風に配列されたと考えられるのである。

『大式三位集』所収の同じ歌は、詞書に「御だうの月見に、人々

まかりたりけるに」とあり、初句を「山の端も」とする。法成寺に月見に出かけ、そこで人々に披露された作と知られる。『頼宗集』には、「心にぞ入る秋の夜の月」と下の句だけが記された歌が見られ、「月かげを心に入ると知らぬ身はにこれる水にうつるとぞ見る」という返歌が収録されている。「心にぞ入る秋の夜の月」は、「秋」と「冬」との相違はあるが、大武三位の歌の一部であったとも推される。

京都のように東西に山がある地域では、月は山の端から出て山の端に入る。それ故に、在原業平の「あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなん」(古今集 巻十七)のごとき歌も詠まれた。大武三位は、そういう月が山の端に入るとの常識を、「山の端は名のみなりけり」でひっくり返してみせたわけである。そして、本当は心に入るのだとした。「心に入る」には「心にかなう」の意もあるが、法成寺の月見に詠まれたものとすれば、いうまでもなく「心月」のことでもある。法成寺のすばらしさにより、心の濁りが消えて澄みきわまったといっているのである。『八代集抄』の「月の入といふも、山のはは名ばかりにて、只みる人の心に入て、面白き心なるべし」との注は、十分とはいえない。ちなみに、「名のみなりけり」を用いて、常識をひっくり返したところに面白さを出そうとした先行作は、

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞ共なく明けぬるも  
のせ

〔古今集〕巻十三 小野小町

大井川うかべる舟のかがり火に小倉の山も名のみなりけり

〔後撰集〕巻十七 在原業平

定めなき人の心にくらぶればただ浮島は名のみなりけり

〔拾遺集〕巻十九 源順

りんだうも名のみなりけり秋の野の千草の花の香にはおとれり

〔源順集〕

などがあつた。

### 題しらず

冬の夜にいくたびばかり寝ざめて物思ふ宿のひましらむらむ

増基法師

〔大意〕 冬の夜に何度ほど目がさめて、物思ふ私のいる宿の

隙間は、今しらんでいるのであろう。

〔鑑賞〕 『八代集抄』に、「此物思ふは冬の感情にや。さまざま

まおもひつづけてあけがたきに闇の隙白くなるを見待るに、あまたたびねざめてのみ、漸々明たるさま也」とある。冬の夜の寂しさは、眠ることができないほど物思いをさせるといっているのである。増基より後の時代の作であるが、『重之女集』にも「冬の夜は思ふことなき人だにもすするにこそねられざりけれ」があり、やはり冬の夜に物思ふ人の苦しみを歌っている。

「物思ふ宿」という詞句を用いた歌には、

なきわたる雁の涙やおちつらん物思ふ宿の萩の上の露

〔古今集〕巻四 読人不知

いとどしく物思ふ宿の萩の葉に秋とつげつる風のわびしさ

しののめに鳴きこそ渡れ時鳥もの思ふ宿はしるくやあるらむ  
〔後撰集〕卷五 読人不知

消えかへり物思ふ宿にいとどしく雪のふりつむ冬はまされり  
〔拾遺集〕卷十三 読人不知

大方に吹く秋風もこころあらば物思ふ宿の萩の葉はよけ  
〔元真集〕

などがあった。このうち、『拾遺集』と『元真集』の歌が詠まれたのは、増基の一首より遅れるかもしれない。増基の「物思ふ宿」は、「宿のひま」とあるから、板屋か苦屋の類であろうか。いずれにしても粗末な庶民の家と解するべきである。

この歌は、増基の家集『いほぬし』には見えない。しかし同集には、「寝らるやとふしみつれどもくさ枕ありあけの月も西に見えけり」が収められているほか、詞書には、

よるねられ侍らぬまにきて侍れば……

夜もすがら月をながむるあかつきに

つごもりにねられず侍るまに

のごとく、しばしば夜眠れぬ由が書かれている。増基は、どちらかといえば実情的詠風の歌人である。したがって、掲出の歌も、どこか旅先での体験に基づいて詠まれた作と考えて不都合ではない。

孟冬 寒氣至ル

北風 何ゾ惨慄ナル

愁多クシテ夜ノ長キヲ知ル<sup>(4)</sup>

といった一節を想起させるのも確かである。とすれば、孤閨をかこつ女性の心情を歌ったものとする解釈も、十分、成立しうることになる。『古今集』の「物思ふ宿」の歌については、関怨詩との共通性がすでにいわれている。

障子に雪のあした鷹狩したるところをよみ侍りける

民部卿長家

とやかへる白ふの鷹を木居をなみ雪げの空にあはせつるかな

〔大意〕 鳥小屋において羽のぬけかわる白い斑のある鷹。その鷹を、止り木がないので、雪もよいの空で獲物に合わせたことだ。

〔鑑賞〕 鷹狩を主題とする三首中の一首である。冬の鷹狩は、秋の小鷹狩に対して、大鷹狩とも、単に鷹狩ともよばれていた。

「とやかへる」に似た語に「とかへる」があり、その意に関して種々の説が唱えられていたようである。しかし「とやかへる」については解釈が一致していて、顕昭の『後拾遺抄註』に「タカラバ夏トヤニコメテ飼タルガ、ソノトヤニテモノカハレルヲトヤカヘリトハ云也。トヤトハ鳥屋ナリ」とあり、上寛の『和歌色葉』にも「とやかへるとは、たかはすだかといひて、いまだ巢にあるをとりて、鳥屋に籠めてかひて、年をこしつれば毛もかはるをとやかへるとはいふ也。年にしたがひて一かへり、二かへりといへば一年二年なり。とやとは鷹すゑたるやなり」と同趣旨の説明が見える。長家の歌では、この「とやかへる」が枕詞風に使用されている。長家の歌

以外では、

とやかへりわが手ならしはしし鷹のくると聞ゆる鈴虫の声

〔後拾遺集〕巻四 大江公啓

とやかへるま白の鷹をひきすゑて君がみかり (以下次)

〔輔尹集〕

などの用例が知られる。また、「雪げの空」は、「ユキフリゲナルンラ」〔後拾遺抄註〕であるという。雪はひとまず止んでいるもの、まだまだ降りそうな気配なのであろう。

「雪げの空にあはせつるかな」は、雪が降りつもれば鷹狩が困難になるのを予測しての表現であると思われる。そのことは、次の能因の歌、「うちらはらふ雪もやまなむみかり野の雉子の跡もたづぬばかりに」によっても推測できる。つまり、雪げの空であったが、木居がなかったので、あえて鷹狩を行なったというのである。もっとも、実際の狩において、木居が準備されていないことは、あまりあるまい。それだけに「木居をなみ」の句はやや唐突であるが、その点に関し、『後拾遺抄註』には「コノ歌ハ障子ノ画ヲミテヨミタレバ、木ヲカカザリケレバ、コキナシト読敷」とある。あるいは、そういう事情があったのかもしれない。

注

(1) たとえば、「十月、あじろ」〔貫之集〕、「十月、うちのあじろにをんなくるまものみる」〔忠見集〕、「はじめの冬、あじ

ろのうへにおきなをり」〔元真集〕、「十月、あじろ」〔源順集〕、「十月、あじろにもみちながれより、旅人あまたとどまりてみるころ」〔能宣集〕などの例がある。

(2) 「橘俊綱考」〔平安文学研究〕25 昭和35・11

(3) 『新古今和歌集全評釈・第三卷』(昭和51・12)

(4) 鈴木虎雄氏訳解『玉台新詠集・上』(岩波文庫 昭和28・5)

の書下し文による。

(5) 小沢正夫氏校注『古今和歌集』(日本古典文学全集 昭和46・4) 一二九—一三〇頁。

(本学助教)